

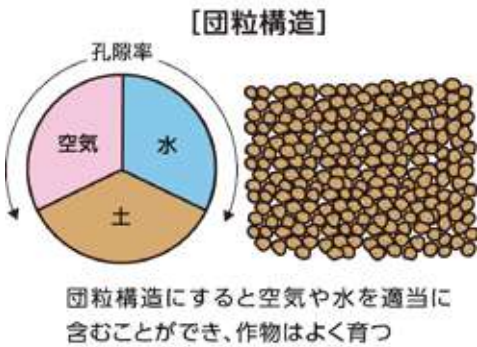
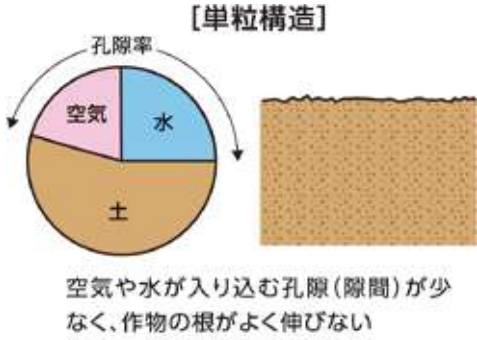
次年度に向けた土作りについて

本格的な冬を迎え、家庭菜園は越冬野菜だけとなり、冬の休閑期に入り、空き畑が多くなります。この機会を捉え、しっかりと土作りし、次年度に備えましょう。

野菜の根が健全に伸びるためには、①水はけと通気性が良いこと、②水持ち(保水力)が良いことが重要な条件となります。

土には、細粒の粘土と粗粒の砂の割合が異なる単粒構造と団粒構造があり、団粒構造にすると孔隙率が高く、空気や水を適度に含み根がよく伸びますが、その状態も数年間野菜を作り続けると、次第に痩せて単粒構造となり、根があまり伸びなくなってしまう。

土を団粒構造にするには、良い粗大有機物の堆肥や緑肥などを十分



に施し深く耕すことが必要です。

根が深く広く張るためには深層まで条件を整えることが大切ですが、その目安として、直径8〜9mmの棒を畑土に差ししたとき、あまり力を加えずに入る作土層が20cm以上あることです。力いっぱい差し込んで測る有効土層が60cm以上あれば申し分ありません。一般にはこれでも十分なこと多いですが、深耕することによりここまで改善することができます。

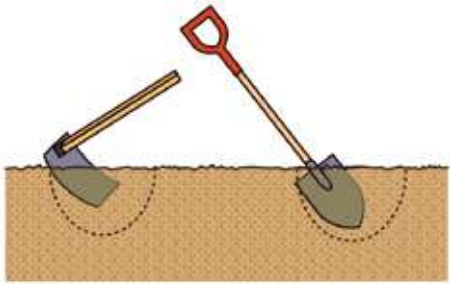
畑起こし、粗大有機物を入れる時期は寒冷の冬が一番です。それは他の作業が暇で、畑が空いているだけではなく、掘り起こした下層の土を上面に出し、厳しい寒気にさらし風化させることにより、物理性が改善され、病原菌や害虫、雑草の種子を

死滅、軽減する効果が大きく發揮されるからです。

作業の手順は、前作の残りかすや病害虫の被害株、残根などをきれいに取り除き、堆肥などの粗大有機物を畑全面にばらまいてから耕します。60cm以上も深耕する場合には先に畑起こししてから、次の耕うん時に粗大有機物を施すのが良法です。

耕した畑土はなるべく表面に凹凸があるままにしておき、寒気に触れる面を大きくします。

土壌の酸性度も冬の間に調べ、pH 6.0〜6.5程度に調整しておくことが大切です。酸性を改良する消石灰の施用量は、砂質あるいは腐植の少ない土壌では少なくて、黒ぼく土では多くを要するので、施用量を誤らないよう注意しましょう。毎年むやみに与え過ぎると弊害を生じる恐れがあります。



1〜2年に1回ぐらいは30cm以上深く耕す

※関東南部以西の平たん地を基準に記事を作成しています。

JAで買える! JAオススメ!

家畜肥料の使い分け

土作りは、肥料効果性と土の物理性改良効果の目的に応じて堆肥の使い分けをしましょう。



発酵鶏糞

特長 窒素・リン酸・カリウムがバランス良く入っているので、基肥として利用できます。追肥としては、葉焼けなどの原因になることがあるので、作物から少し離れた場所に施肥してください。

価格 15kg入り 308円(税込)



牛ちゃんパワー

特長 牛ふんと国内産パーク(樹皮)を丹念に発酵処理しており、施用すると土壌がやわらかくなります。また、保水性・透水性・通気性を良くし、健康な土壌に若返ります。土壌の酸性化や肥焼けを防ぎ、肥持ちも良くなります。

価格 20kg入り 605円(税込)

